



AJEL

日本ラテンアメリカ学会 会 報

2013年3月31日



AJEL

No.110

1. 理事会報告
2. 第34回定期大会の開催案内
3. 研究部会報告
4. 研究部会開催案内
5. 寄稿：「地域研究学会連絡協議会（JCASA）総会参加記」
6. 寄稿：「CELAO第6回大会（京都）の準備状況」
7. 新刊書紹介
8. 事務局から

1. 理事会報告

○第139回理事会議事録

日 時：2013年2月16日（土）13時30分

～18時30分

場 所：上智大学四谷キャンパス2号館8階 2-815-a 会議室

出席者：幡谷（理事長）、新木、受田（書記）、牛田、大串、後藤、鈴木、田中、畑

欠席者：出岡、松久、柳原

<報告事項>

(1) 会報（新木・牛田各理事）

・第109号を11月30日に刊行した。第110号を3月末の刊行に向けて準備中である。原稿締め切りは2月中を目処とする。第111号は定期大会報告号となるが、近年原稿字数制限の不徹底により会報が厚くなりすぎる傾向にあるので、司会とコー

ディネーターに会報用原稿を各報告者200字以内に徹底することを周知する。

(2) 地域研究部会（大串・田中各理事）

なお松久理事の報告内容を理事長が代読）

・東日本、中部日本、西日本の各研究部会の2012年12月開催分の報告と2013年4月開催予定の案内があった（詳細は本号に掲載）。

(3) 会計（畑理事）

・2012年度の予算執行状況を確認した。

(4) 学術・国際交流（鈴木理事）

・JCASA（地域研究学会連絡協議会）年次総会（2012年12月2日、立教大学にて開催）に出席した。

・CELAO実行委員会が発足し、2014年9月に京都大学で大会が開催される予定。2013年に京都大学CIAS（地域研究統合情報センター）・上智大学イベロアメリカ研究所の共催でプレセッション的なシンポジウムが上智で開催される予定。

<審議事項>

(1) 第34回定期大会について

・現時点で、個別報告30件、パネル4件の予定である。個別報告の討論者について、本人の希望明記がない場合の候補者を選出した。パネルで非会員の報告予定者があったが、パネル報告者は原則として会員であることとし、実行委員会より入会を勧めってもらうこととする。当日の託児所利用については、現在大会開催校近辺の託児所を調査中であり、報告者で託児

所を利用する場合の助成については今後検討を続ける。

(2) 地域研究部会の運営と広報について

- ・報告申請者多数の場合の扱いには、会場設定の制約などから半日でおさまる規模を目安とし、それが難しい場合は辞退者を募るほか、適宜担当理事の判断で調整する。地域研究部会の報告内容と同一のものが定期大会で報告されることはあってはならないことを確認した。次回大会については地域部会でも発表済みの申請者が類似の報告テーマでエントリーした場合には発表内容を変えてもらうように依頼する。地域研究部会の報告要旨のHP掲載は、会報の公刊スケジュールとは別に行う。7月の会報にも当該年次の地域部会のお知らせを掲載し、会員の意識化をはかる。

(3) 会計：

- ・若手支援助成について：報告証明書の写しも求めていくこととする。申請が報告前になされるケースでは、報告者の氏名や報告内容が掲載されたプログラム等の提出を求める。中部秋部会における旅費助成支払について、本会員は東日本部会での発表を希望していたが、発表申請者が多数であったため、中部部会で発表することになったことを確認した。
- ・2013年度予算案について：大会経費と企画費を据え置く代わりに、予備費を増額し、外国人研究者の招聘などで大会の出費が高んだときに充当する。名簿作成費を計上する。その他の費目は2012年度予算額をベースとするが、執行状況等を考慮して調整する。

(4) 事務局：入退会の承認；シニア会員制度；名簿作成

- ・入退会者（入会9名、退会2名）が承認された。
- ・シニア会員制度の導入に伴う修正版会則

を、年報の印刷に合わせて事務局が作成することが確認された。

- ・名簿作成については、アンケートの依頼文、記入要領、アンケート用紙の文面を検討した。2月末頃に全会員に以上を郵送し、4月10～15日までに封書で返送を求め、6月の定期大会までの完成を目標とする。

(5) 学術・国際交流

- ・担当理事より、2013年度後期にサバティカルで海外に何度か出る予定との報告があった。2014年度の第35回定期大会での理事会からの連携およびCELAO実行委員会との交渉窓口を現担当理事から交代することを確認した。

(6) HP および年報：

- ・投稿論文のWEB掲載については、次号年報の掲載予定者には編集担当理事がWEB掲載許諾を問うことを確認した。これに伴い、WEB掲載を明記した執筆要領を今後作成していくことと、次号より年報の印刷業者に原稿のPDF化を要請することを確認した。また、執筆者への問い合わせなど、バックナンバーのWEB掲載業務の担当者を今後決定することが確認された。

(7) 次回理事会は定期大会当日6月1日獨協大学にて開催予定。

以上（文責：幡谷）

2. 第34回定期大会の開催案内

第34回定期大会は、2013年6月1日（土）、2日（日）、獨協大学（埼玉県草加市）で開催されます。すでに多くの個人報告やパネルの申し込みを受け付けております。また実行委員会でも、ラテンアメリカ・カリブ諸国共同体（CELAC）へと向かう新しい地域統合（地域的連携）に関する記念講演、ラテンアメリカ研究の境界と

射程に関するシンポジウムなどを準備しています。詳細は追って学会のメールニュースやホームページに配信、掲載いたします。多数の皆さまのご参加をお待ちしております。

浦部浩之

(獨協大学・第34回定期大会実行委員長)

3. 研究部会報告

下記のように各研究部会の研究会が開催されました。その報告は以下のとおりです。

《東日本部会》

東日本部会は2012年12月22日(土)の13時30分から18時30分まで、東京大学本郷キャンパスで開催され、報告者6名、討論者3名を含む28名が参加した。5つの報告があったが、報告者が発表時間を厳守してくれたこともあり、予定通りに進行することができた。多くの出席者に恵まれた活発な研究会となった。以下は各研究の報告と議論の要旨である。

(大串和雄:東京大学、和田毅:東京大学)

○「3重のジレンマの中で—サンパウロ州における軍警察をめぐる認識枠組み」

清水麻友美 (東京大学大学院)

近年のブラジル・サンパウロ州軍警察では、人権侵害事件が巻き起こした批判を受けて改革が行われている。既存の研究が、「行為から言説へ」という視点から、警察暴力の原因について改革が進んでいないと非難するのに対し、清水会員は、「言説から行為へ」という視点を加え、人権侵害という現象が行為と言説の相互反映的過程であると主張し、言説がいかに生産・再生産され、警察官の日常行為の背景となっているかを指摘する。具体的には、警察改革の三本柱である、コミュニティ・ポリシング、人権、総合

的品質管理はそれぞれ警察の負のイメージへの対応であるが、他方でそれらは互いに対立して3重のジレンマと呼べる関係にもあり、警察官はそれら対立する柱の間でバランスを持って行為することが求められているという。この発表について、「ブラジル警察は人権侵害をしなくなったのにイメージが現実とかけ離れている」という話にも聞こえるが、警察による人権侵害はまだ続いていること、それでもサンパウロはブラジルの他の地域と比べると改革が進んでおり、ブラジル全体の一例としてサンパウロを取り上げるのは不適切であること、全体として警察の主張をそのまま受け取っている傾向がみられるが裏付けをとることの重要性、そして、ブラジルの警察官の待遇の実態を調査する必要性などが指摘された。

○「ボリビア現地報告—エボ・モラレス大統領が進める改革」

渡邊利夫 (前在ボリビア特命全権大使)

岡田勇 (前在ボリビア大使館専門調査員)

最近ボリビアから帰国した2名の発表者が、現地の政治経済情勢について報告した。まず、渡邊氏は、今世紀の中南米では新自由主義経済政策への反省から左翼主義が伸長しているという議論が日本では大勢であるが、ボリビアについてはその他の要因も勘案する必要があると述べた。それは、これまで政治力を持っていなかった先住民が発言力を強めていることや、52年「ボリビア革命」の政治家が相次いでいなくなったことなどである。またエボ・モラレス政権が進めようとしている“Revolución Democrática Cultural”、そして、その中心思想である「良く生きる Vivir Bien」のイデオロギーと実際の政策についても説明した。次に、岡田会員は、エボ・モラレス政権下の一般的な経済指標を概観し、「国有化」政策の動向や資源採掘産業を除く生産性の低さといっ

た中長期的問題を指摘した。後半は多くの活発な質疑応答があり、米州開発銀行や国連などの国際機関は Vivir Bien に基づく政策を支援しているのか、エボ・モラレスの政策を進める上で中央政府と地方政府の関係——とくに税源の分配の実情——はどうか、最新のボリビア政治経済情勢について意見が交わされた。

○「先住民の『母なる大地』と黒人の『先祖の土地』 —ホンジュラスの事例」

金澤直也（早稲田大学非常勤講師）

金澤会員は、ホンジュラスにおける先住民の「母なる大地」と黒人の「先祖の土地」というふたつの土地概念の違いを検討し、なぜ、アフリカ系子孫のエスニック集団「ガリフナ」には「先祖の土地」という概念はあるのに「母なる大地」という概念はないのかという興味深い問いを提示した。金澤会員は、ホンジュラスの民族運動関係者へのインタビュー調査結果を踏まえ、ふたつの世界観の相違は先住民と黒人の生活習慣の違いと創世神話の有無に起因すると主張した。すなわち、先住民は現在住む土地、つまり「母なる大地」から生まれたという創世神話をもつが、アフリカ大陸にルーツがあるガリフナは現在住んでいる土地における創世神話をもたないため、「母なる大地」という概念がない、そして必要がないことを説明した。この発表に対して、アフリカにルーツがあるとはいえ 300 年もあれば「自分たちは何者であるか」という神話・語りが生まれるには十分なのではないか、ガリフナの中にも意見の多様性があるようだがどう解釈するのかなどのコメントが寄せられた。さらに会場からは、ガリフナと他地域のカリブ海から来た人々との共通性の比較は行っているか、政治的リーダーの話とガリフナの世界観は別物ではないか、神話も歴史も現在のニーズに従って今作られて

いるものだという視点が欠けているのではないかなど多くのフィードバックがあった。

○「メキシコ、オアハカ州の社会紛争におけるストリートアートをを用いた民衆の抵抗」

山越英嗣（早稲田大学大学院）

メキシコ南部オアハカ州では、2006 年に生じた社会紛争において、ストリートアートをを用いて政府への抵抗を試みる集団 ASARO が現れた。山越会員の発表は、ASARO が制作した具体的な図像を扱い、民衆がいかなる社会的想像力を発揮したのかを読み解こうというものである。従来、ストリートアートは「管理社会への抵抗」という言説と親和性をもってきたが、本事例では、民衆間の情報共有や、テリトリアルな空間を創出するための視覚的なツール、超自然的な存在を可視化する装置などのように、多様なストリートアートの用法がみられた。また、紛争終結後は、非合法にストリートへ設置した作品をギャラリーやカフェなどの〈制度〉的空間に持ちこみ観光資源として活用すること——ストリートアートの「モニュメント化」——によって、外国人観光客などの外部社会へと訴えかけようとしたと主張した。この発表に対し、匿名性のストリートアートではメッセージが民衆に伝わりにくいのではないかと、メッセージを受ける民衆の具体的な反応についてのデータはあるのか、政治社会的文脈を理解しない外国人観光客にメッセージが伝わると言えるのかなどの問いかけがなされた。また、会場からは、ASARO の現地での認知度、他の抵抗集団との関係、ASARO 芸術家の出身階層などについての質問が続いた。

○「メキシコ近代建築運動について」

大津若果（早稲田大学大学院）

20 世紀初頭にメキシコに広まった西洋近代建築を、メキシコ近代建築運動という

観点から考察する際、ふたつの重要な点を指摘できると大津会員は主張する。第一点は、西洋近代建築よりも形態が簡素化したメキシコ機能主義建築が看取される点である。これには、1932年の米国の「インターナショナル・スタイル」よりも前に西洋近代建築がメキシコに導入されていたことが重要であり、1929年に建築家ファン・オゴルマン（1905-82）が設計した〈セシル・オゴルマン邸〉はその代表例である。「機能主義」と呼ばれた建築スタイルは、出版物のみに学ぶ20代のアカデミー出身者たちによって試みられ、急速に具現化されていった。第二点は、インターナショナル・スタイルが国内に広まった1950年代に、〈大学都市（1949-52）〉などからもわかるように、そのインターナショナル・スタイルとの対立が示されたことだという。この発表に対して、メキシコ近代建築運動の特殊性やメキシコの地域性は何であるのか、なぜ近代建築を運動という用語を用いて説明する必要があるのかなどの問いかけがなされた。会場の聴衆からは、欧米とのつながりだけではなくラテンアメリカの国同士での近代化建築のアイデア交流の可能性の追求、大学都市のあり方の思想などについてメキシコがラテンアメリカで果たした役割の探求など、さらなる研究の方向性についての意見が多く出された。

《中部日本部会》

2012年12月15日、13:30から17:00まで、中部日本部会の研究会が開催され、報告者4名を含む12名が参加した。本部会で会員4名の報告があるのは、久しぶりのことで、関係者として大変うれしく思う。

以下は報告者自身の要旨である。

（田中 高：中部大学）

○「植民地時代ルイジアナーテキサス境界地域ナキトシュにおける先住民交易」

二瓶マリ子（東京大学大学院）

本報告では、以下の参考文献に依拠しつつ、植民地時代、テキサスとの境に位置するルイジアナ地方ナキトシュで行われていた先住民交易を俯瞰した。18世紀のナキトシュは、フランス領時代（1714～1762年）とスペイン領時代（1762～1803年）に2分することができる。フランス領ナキトシュにおいて、先住民交易は利益が得られる唯一の商業活動であった。そのため18世紀前半は、ナキトシュの開祖であり特権階級に属するLouis Juchereau de St. Denisとその一族が、カド族をはじめとする境界地域の先住民との交易を独占的に行っていた。しかしルイジアナがスペインの手に渡ると、先住民のキリスト教化および定住化に重点を置くスペイン王室は、先住民交易を厳しく規制するかわりにタバコの生産を推奨した。その結果、フランス領時代に先住民交易をしていた特権階級の人びとは、交易をやめてタバコのプランテーション経営に従事することとなった。そして、フランス領時代よりも利益が望めなくなった先住民交易は、ナキトシュに流入するヨーロッパ系白人の新参者やメティス、先住民、黒人奴隷といった社会の底辺層が行う商業活動になっていった。特に、下層階級の白人の出現は、18世紀後半に突入してからみられた新たな現象であった。こうして植民地時代ナキトシュでは、18世紀前半から後半にかけて、商業活動が大きく変化すると同時に、社会の階層化が進んだ。

参考文献：H. Sophie Burton and F. Todd Smith. 2008. "The Indian Trade in Colonial Natchitoches," in *Colonial Natchitoches: A Creole Community on the Louisiana-Texas Frontier*

(College Station: Texas A&M University), pp.105-126.

○「The Legal Compliance of the Central American Maquilas with the Multilateral and Regional Trade Agreements」

アレハンドラ マリア ゴンザレス
(名古屋大学大学院)

Central American Governments have promoted textile trade originating from maquilas to stay competitive in the international trade arena. Maquilas are significant sources of employment, investment, foreign exchange earnings, and of transfer of technology and managerial skills. To promote them, fiscal incentives and tax holidays are granted to special business groups. Imports and exports in the assembly processes are tax exempted. Countries have enacted their own domestic legal framework in the form of Temporal Imports Regimes and Industrial Processing Zones Laws to ensure fiscal and customs benefits and security. The legal frameworks at times contradict with the WTO rules in that maquilas might be considered as prohibited export subsidies. Guatemala, El Salvador, and Costa Rica have started drafting new laws to comply with WTO rules. Honduras and Nicaragua at the time can enjoy an exemption to the prohibition, but based on economic growth, the exemption might phase out. Drafting should seek to strike a balance between international law compliance and codes of conduct and to maintain economic and social interests of the stakeholders.

○「メキシコの麻薬組織とPAN 政権の対麻薬政策
—フォックス政権とカルデロン政権の12年—」

望月博文 (名古屋大学大学院)

今、メキシコでは、政府軍・警察と麻薬カルテル・犯罪組織内の争いなど、血なまぐさい戦いが続いている。本報告では、麻薬組織の誕生・変遷・特徴などメキシコの犯罪カルテル、それに相対する政治・経済動向等の変化を通し、メキシコの社会構造を理解しようと試みた。そして71年間続いたPRI 政権に終止符を打ったフォックス政権、麻薬戦争として犯罪組織に直接対峙したカルデロン政権の政策、その成果について検討した。

発表構成においてはまず、1980年ころの麻薬カルテル誕生・変遷、特徴とその活動、そして麻薬カルテルに対するメキシコの警察・検察・司法の体制と活動などを明らかにした。次に、メキシコ経済の現状分析を踏まえ、二人のPAN 政権大統領(2000～2012)の対麻薬政策を検討した。終わりに米国、オランダなど世界各国の麻薬合法化政策を通し、暴力の終焉に向けてメキシコの麻薬政策を考察した。

今学会発表の内容は、2013年に予定している現地メキシコにおける調査の基本をなす研究であった。メキシコの政策の現状を研究するに当たり、「PAN 政権に対する研究では十分でなく、PRI 政権後半の政策も対象にすべきではないか」など、多くの先生方から頂いたご指摘を、今後の研究に役立てたい。

○「An Analysis of the Evolution of Trade Relations between Brazil and China」

光安アパレシダ光江 (浜松学院大学)

This presentation showed the changes occurred in the world economy and the increasing importance of two BRICs countries, Brazil and China. The analysis

of these two country's trade performance revealed that China has played an important role in world economy and greatly influenced world trade. In case of Brazil, trade with China has changed drastically, with substantial increases in exports and imports.

《西日本部会》

2012年12月8日、2時から5時半まで、同志社大学において西日本部会が開催された。部会の参加者は10名、3つの発表に対して質問、意見の交換がなされた。発表は、歴史学、文学、映像によるエスノグラフィーと、分野も時代背景も異なるもので、各専門分野からの質問は参加者が少なかったことから限定的だったが、研究分野を越えた熱心な質疑応答が行われた。八十田会員の発表は、文書が書かれた歴史的背景に着目して、先住民医療がヨーロッパ医療の理論を薬効の経験的知識に融合させながら生き延びてきたと結論づけた。中村会員の発表は、ストルニイの詩に現れた川と都市のイメージをめぐる解釈とストルニイの自殺めぐり前後の詩の表現に関して質疑が行われた。田沼会員の発表では、最初に今回のドキュメンタリーの背景説明があり、1時間のドキュメンタリーを見た後に、映像によるエスノグラフィーの可能性についての質問があった。以下は、発表者による発表の要旨である。

(松久玲子：同志社大学)

○「Libellus de medicinalibus indorum herbis (クルス・バディアーノ写本) に混在するヨーロッパと先住民の医療について」

八十田糸音

(大阪大学大学院 人間科学研究科)

「クルス・バディアーノ写本」は、16世紀のナワ人医師の手による、現存する唯一

の先住民医療の書であると考えられている。その内容は西洋と先住民医療の混合であるとの指摘もあるが、先行研究の多くは、本書の先スペイン期の先住民医療に関する史料としての価値を見極めるため、その内容から先住民もしくはヨーロッパ医療の性質を探ることを目的としている。

本発表では、本書はヌエバ・エスパーニャのメンドーサ家の依頼で作成されたものであり、新大陸の薬草貿易の許可を得るため、国王に謁見する際に贈られたという点に着目し、本書が作成された経緯や歴史的背景にまず焦点をあて、そこから本書に記述された治療法の性質の再検証を行った。

その結果、本書はヨーロッパ医療の理論に沿って先住民医療の薬材を使用するための、ヨーロッパの人々に新たな医療の試みを提案する目的で書かれた書であると考えた。

また、エメラルド等ヨーロッパで万能薬と考えられていた薬材が、先住民が重視していた「3つの魂」に関係の深い疾病の治療に用いられていること等、先住民医療的解釈のみで説明付けられないこと、メンドーサ家の主要輸出商品とみなされているサルサパリラが、梅毒や痛風等16世紀のヨーロッパの人々を悩ませた病気の治療法を記述した箇所であらうと指摘した。

○「アルフォンシーナ・ストルニイ『デスマスクとクローバー』(1938)におけるラブラタ川とブエノスアイレスについて」

中村多文子

(京都外国語大学他 非常勤講師)

アルフォンシーナ・ストルニイは20世紀前半に活躍したアルゼンチンの女性詩人である。この時期、ブエノスアイレスは近代化の発展とそれに伴う都市問題を抱えていた。また、都市は文学において一つの大きな関心事であった。こうした中、都市で

執筆した作家としてストルニィは都市をいかに表現したのだろうか。本報告では、最後の詩集『デスマスクとクローバー』に収められている3篇の詩を例に考察した。

彼女の都市をテーマにした詩には川がしばしば登場する。地理的要因があるとはいえ、その存在は何らかの意味を持つと考えられる。『デスマスクとクローバー』以前の作品では、主に都市描写の中に川が登場し、その一部であった。しかしこの詩集では、川描写の中に都市が埋まっている詩が数篇ある。なかでも本報告で扱った“Río de La Plata en gris áureo”や“Río de La Plata en lluvia”では川を理想の対象とし、理想とはかけ離れた都市の現実をほのめかしている。一方、“Danzón porteño”では、ブエノスアイレスの境界線をなす川とそこにかかる橋を利用し、貧困地域の悲惨な状況を描写している。これらの詩の共通点として、詩人の理想や願望が込められていること、都市の苦しい状況が暴かれ、暴力や死が描かれていることがあげられる。これらを表現するために、川と都市は対照的に描写されてはいるが、両者は必要な要素であったと言えるだろう。

○「映像作品『Cuba Sentimental、旅の記録』について（監督：田沼幸子、助監督：レオニード・ロベス、60分）」

田沼幸子（大阪大学）

本作は『Cuba Sentimental』（監督・撮影・編集 田沼幸子 2010年、以下『CS』と略称）が各地の映画祭および登場人物である本人たちにどのように受けとめられたかを記録したものである。『CS』は、ハバナで長期調査を行った著者が、なぜ同世代のキューバ人らが移民したのか、その背景および彼らの感情的な側面をキューバ国外の人に知らせたいという動機から制作された。本作を観た登場人物からは、「自分たちの小

さな現実に光を当ててくれた」という声があがった。各地の映画祭では、技術的な欠点にも関わらず、登場人物の魅力に引き込まれ、これまで知らなかったキューバの現実を知る事ができたと評価された。本国では現地の若者たちに、通常、陽気な国民として表象されがちなキューバ人の「孤独」が描かれていることに驚いたと言われた。

本作はまた、『CS』の人物たちの「その後」を追っている。「ここが最終目的地ではない」と言っていた彼らも、多くはまだ元の移住先で暮らしている。それは30代半ばを過ぎた登場人物たちが育児を始めていることと関係している。1999年の「エリアン少年事件」以来、子どもの出国が制限されたため、登場人物らには子どもがいなかった。しかし生活基盤が固まり、年齢的な制約もあるなか、出産に踏み切るカップルが増えてきたのである。異国で生まれた子ども達を抱えた彼らがどのような生き方を選ぶのか、引き続き注目していきたい。

4. 研究部会開催案内

下記のように各研究部会の研究会が開催されます。積極的にご参加ください。発表者・発表題目および発表順は、会報原稿出稿時点で予定されているものです。正式のプログラムはホームページおよびメールで配信される学会ニュースをご覧ください。

《東日本部会》

日 時：2013年4月6日（土）

13:30～18:30

（延長の可能性もあります）

会 場：東京大学駒場キャンパス

18号館4階コラボレーションルーム3

（http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam02_01_17_j.html）

当日18号館入口に担当の者が見

当たらない場合は、入口横に設置されている電話で「コラボレーションルーム3」(内線48762)にご連絡ください。内線番号は電話下にも表示されています。

発表者・発表題目：

1. 吉木双葉 (東京大学大学院総合文化研究科博士前期課程)

「セサル・チャベス主導の農業労働者運動—成功要因再考」

討論者：中川正紀 (フェリス女学院大学文学部)

2. 丸山悦子 (フェリス女学院大学文学部)

「カリフォルニア州サンノゼ市のメキシカン・ヘリテージ・プラザ—建設の意図と財政問題からみえる課題」

討論者：中川正紀 (フェリス女学院大学文学部)

3. 飯尾真貴子 (一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)

「非自発的帰還者の生活再構築プロセス—メキシコ市大都市圏大衆居住区ネサワルコヨトルに生きる帰国者たちの事例研究」

討論者：受田宏之 (東京外国語大学)

4. 酒井喜八郎 (名古屋大学大学院博士課程単位取得満期退学)

「JSL 年少者児童の二言語・二文化思考の研究—日本語指導から教科指導へ」

討論者：小貫大輔 (東海大学教養学部)

5. 駒井睦子 (東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程)

「アルフォンシーナ・ストルニ『七つの井戸の世界』にみられる前衛詩への接近」

討論者：福嶋伸洋 (東京大学文学部非常勤講師)

担当理事：大串和雄 (東京大学)

ohgushi@j.u-tokyo.ac.jp

《中部日本部会》

日時：2013年4月20日(土)

13:30～17:00

会場：愛知学院大学 楠元キャンパス(地下鉄東山線本山駅1番出口、徒歩5分)
愛知学院大学歯学部基礎教育研究棟第二会議室(予定)

担当理事：田中 高 (中部大学)

takasi.chubu@gmail.com

《西日本部会》

日時：2013年4月13日(土)

13:30～18:00

会場：同志社大学烏丸キャンパス
志高館2階214教室

(<http://www.doshisha.ac.jp/information/campus/imadegawa/karasuma.html#campusmap>)

発表者・発表題目：

1. 二瓶マリ子 (東京大学大学院博士課程)

「18世紀末テキサス—米国間の越境的な家畜交易—フィリップ・ノーランを中心に」

2. 西條万里那 (神戸市外国語大学大学院博士課程)

「まなざしとエロティシズム—カルロス・フェンテス『アウラ』から—」

3. 木下直俊 (東海大学非常勤講師、前在エクアドル日本大使館専門調査員)

「エクアドル・コリア政権における「市民革命」の成果と課題」

4. 杉田優子 (エクアドルの子どものための友人の会代表)

「エクアドル山岳地域北部カヤンベでの25年間にわたる教育支援活動の成果と課題—学びのプロセスの視点から—」

5. 工藤 瞳 (京都大学大学院博士課程)

「ペルーにおける宗教系民営公立校に関する一考察—カハマルカ区を事例に—」

担当理事：松久玲子 (同志社大学)

rmatsuhi@mail.doshisha.ac.jp

5. 寄稿：「地域研究学会連絡協議会 (JCASA) 総会参加記」

鈴木 茂 (東京外国語大学)

去る12月2日(日)、午後1時半より立教大学池袋キャンパスにおいて、地域研究学会連絡協議会 (JCASA) の2012年度総会が開催されました。JCASAは、地域研究を担う諸学会を緩やかな横断ネットワークで結び、意見交換の場と共同行動の基盤を構築することを目的に、2003年に設立された団体です。2010年に日本マレーシア学会が加入して、現在の加盟学会は20学会となっています。2年ごとに幹事学会を選出することになっており、日本ラテンアメリカ学会は現在の幹事学会の一つです。

今回の総会では、最初に事務局長の竹中千春立教大学(アジア政経学会)から活動・事業報告がなされた後、日本学術会議・地域研究委員会の田中耕二委員長(京都大学)からの同委員会の活動報告が、田中氏欠席のため、配付資料に基づいて竹中事務局長から伝えられました。その中で注目を引いたのは、平成24年7月開催の学術会議第一部会(人文・社会系)で報告された「大型施設計画・大規模研究計画に関するマスタープラン策定の方針素案」を承けて、同委員会のもとにある各分科会(地域研究、地理学、人類学)で大型研究計画の策定に向けた学術研究領域の設定について検討がはじまっているという点、上記3領域における学部教育の分野別質的保証についての検討が続いているという点です。前者は、予算の大半は自然科学分野に配分される模様ですが、科研費やCOEの大型版といったものが想定されているようです。後者については、地域研究領域で「地域の教え方についてのアンケート」が計画されているとのことでした。

総会の最後では、地域研究の今後のあり方と可能性について、参加者による意見交換が行われました。

6. 寄稿：「CELAO 第6回大会(京都)の準備状況」

鈴木 茂 (東京外国語大学)

前号で村上勇介会員(京都大学)から紹介があったとおり、ラテンアメリカ研究アジア・オセアニア審議会 CELAO (Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y de Oceanía)の第6回国際大会が2014年に京都で開催されることになりました。本学会も大会開催に積極的に協力することを前回理事会で確認したところですが、今回は、村上会員から提供された資料に基づき、現在までの準備状況をお知らせします。

第1回大会実行委員会が2013年2月1日に開催され、以下のとおり、事務局を京都大学地域研究統合情報センターに設置し、実行委員会が正式に組織されるとともに、開催期間・会場が確定されました。

CELAO 第6回大会(京都)実行委員会

委員長 小林致広(京都大学)

副委員長・事務局長 村上勇介(京都大学)

会計 宮地隆廣(同志社大学)

委員 浜口伸明(神戸大学)

池田光穂(大阪大学)

Jong, Wil de(京都大学)

松久玲子(同志社大学)

関雄二(国立民族学博物館)

住田育法(京都外国語大学)

高橋百合子(神戸大学)

立岩礼子(京都外国語大学)

塚原信行(京都大学)

内田みどり(和歌山大学)

(ただし、実行委員は準備の進捗状況にあ

わせて追加する可能性がある。)

開催期間:2014年9月16日(火)~18日(木)
(ただし、報告申込が多い場合は
19日(金)まで)
会場:京都大学文学部校舎

また、今後の予定の概略は次のとおりで
す。実行委員会から正式に発表され次第、そ
の都度、本学会の会報・ホームページでも
広報する予定です。

2013年4月まで
準備・運営体制の構築、ホームページの

立ち上げ、資金・寄付などの模索開始
2013年6月30日(日)
大会テーマの決定
2013年9月1日(日)
パネル・個別発表の申し込み受付開始
2014年2月15日(土)
パネル・個別発表の申し込み締め切り
2014年3月31日(月)
パネル・個別発表の採否通知
2014年7月31日(木)
報告ペーパー提出締め切り
2014年8月15日(金)
報告資料(パワーポイントなど)提出締
め切り

7. 新刊書紹介

篠原愛人『アメリゴ＝ヴェスプッチ』
清水書院(人と思想192)、2012年8月刊、255頁(紹介者 井上幸孝 専修大学)

「アメリカ」という大陸名の由来となっ
たアメリゴ・ヴェスプッチは、歴史上、そ
の名をよく認知されているが、必ずしも
実像が知られていない人物の典型であらう。
また、時代や場所、あるいは研究者の間で
正反対の評価を受ける人物もいるが、ラス
・カサスやコロン(コロンブス)と並んで、
アメリゴはそうした人物の格好の例でもあ
るだろう。アメリゴに関する著作としては、
色摩力夫氏の『アメリゴ・ヴェスプッチー
謎の航海者の軌跡』(中公新書、1993年)が
あるが、本書はそれ以来のアメリゴを本格
的に扱った日本語での著作となる。

本書の構成は、研究史上の問題をまとめ
た序章(プロローグ)、アメリゴがスベ
インへ赴くまでの足跡(I章)、コロンやベ
ラルディとの関係(II章)、第1回航海の問題
(III章)、オヘータ隊での航海(IV章)、ポ
ルトガル王の下での航海(V章)、スペイン

へ戻ってからの活動(VI章)、アメリゴの
「著作」およびアメリカの呼称をめぐる議
論(VII章)と終章(エピローグ)からな
る。アメリゴ作とされる『四度の航海』と
『新世界』は、半世紀近く前に大航海時代叢
書(第I期第1巻、1965年)で増田義郎氏
によって翻訳されているが、本書では、数
少ないアメリゴの書簡(3編の書簡と1つ
の断片書簡)の翻訳が巻末に収められてい
る。以下では、紹介者の観点から本書の際
立った特徴と思われる三点を挙げて順に述
べてゆきたい。

まず、一点目は、時代背景もしくはアメ
リゴをとりまく環境が詳細に描写されてい
ることである。同時代のコロンをはじめア
メリゴの身の回りの人々、さらには、「発
見」の時代にあって競合していたスペイン
とポルトガルの動向が、アメリゴの行動と
重なり合う形でたびたび詳述される。著者

自身も述べているように、アメリゴに関する史料は多くはない。しかし、その制約ゆえに大航海時代のハイライトともいべき時期の流れが理解でき、その中におけるアメリゴの役割が解き明かされるという叙述が展開されている。

第二点は、アメリゴにかかわる事実関係を解明する上での複雑な史料の吟味である。十分な史料批判や史料間の照合なしに、特定史料の記述を鵜呑みにして過去を再構成してはならないのは当然だが、これほど情報量の少ない人物だとその誘惑も大きかったことであろう。だが、著者は、各種史料の、時に難解と思われる突き合せを緻密に行い、批判的に検討したうえで、一定の解釈や可能性を導き出そうとしていく。読者にとっては推理小説の謎を解き明かしていくプロセスのごとく楽しめるが、歴史研究者である紹介者にとしてみると、気の遠くなるような史料の批判・検討を重ねている様が窺われ、著者の苦労の跡がにじみ出ている部分であるように感じられる。

第三の特徴としては、研究者と言語の問題である。16世紀メキシコ史を専門とする著者にとって大航海時代はごく近い分野に見える。しかし、著者自身が述懐してい

るように、そこには大きな落とし穴があり、トスカーナ語で文書を読む必要性から「イタリア語の勉強にも時間を割く破目になった」と言う。歴史学には史料の制約がつきまとうものであるが、実際の歴史研究の場では、しばしば研究者の扱える言語という別の制約がある。とりわけイスパノアメリカ史を研究していると、紹介者も含め、ついつい「スペイン語の世界」に閉じこもってしまう。原典となる史料を読み、これまで知られていない出来事を掘り起こしたり、従来とは異なる歴史解釈を導き出したりするという作業に精を出すのであるから、言語の問題は重要である。しかし、大航海時代の「発見・征服者」の生きた社会はそのような「閉じられた世界」ではなかった。スペイン語のみならずイタリア語、ポルトガル語を操る者たちが行き交い、ラテン語と並んでこれらロマンス諸語の使用が入り乱れていた。アメリゴという難しい人物を中心にそうした社会を真っ向から扱った本書は、アメリゴについて知るための好適書であるだけでなく、歴史研究者としてのチャレンジ精神を後進の私たちに示してくれる意欲作でもある。

この編著は、2009年度から2011年度の南山大学地域研究センターの共同研究「ソフトパワーと平和構築」（研究代表者：浅香幸枝）の研究成果を基にしている。23人の研究者が、共同研究に参加し、12名が、南北アメリカ地域と日本を研究対象とし、それぞれの専門分野において、経済力や文化力の側面から事例分析をし、研究成果執筆に携わっている。

本書は6部、全18章からなり、以下の通りに構成されている。「第1部 ニューパラダイムの形成」（第1章「ソフトパワーとしての子どもの本」、第2章「ソフトパワーとしての和学」、第3章「人間の安全保障と日本のODA」）、「第2部 地球社会の枠組み形成」（第4章「アジア・太平洋自由貿易圏の構築とTPP」、第5章「日本の環境外交とソフトな安全保障」、第6章「ソフトパワーとしてのヨーロッパの安全保障政策」）、「第3部 共通の文化圏の連帯」（第7章「スペイン語圏と日本を文化で結ぶ」、第8章「ポルトガル語諸国共同体（CPLP）の可能性と限界」）、「第4部 ソフトパワーとソフトなパワーの諸相」（第9章「台頭する新興国ブラジルとの新たな関係」、第10章「ペルーでの考古学調査」、第11章「日本におけるアルゼンチン・タンゴの変容」）、「第5部 ソフトなパワーとしての日系人」（第12章「二つの祖国を結ぶ日系という生き方」、第13章「ソフトパワーとしてのCIATE」、第14章「ニューメディアとソフトパワー・コミュニケーション」）、「第6部 大使との交

流」（第15章「ソフトパワーと平和構築」、第16章「ソフトパワー的要素による国際的プレゼンスの向上」、第17章「ソフトパワーと平和構築」、第18章「ソフトパワーと平和構築」）である。

編著の特徴として、2点指摘したい。第1に、専門分野の異なる研究者たちの共同研究の手法として、「ソフトパワー」や「平和構築」の概念を予め厳密に定義せず、各研究領域での事例と研究蓄積に応じて、概念自体を再検討する手法を用いている。この共同研究では、分析対象国、政治・経済・社会・文化・哲学・教育・国際関係と研究対象は多岐にわたり、研究者間の交流、意見交換を通して、生活者としての「ソフトなパワー」という概念を得たことが言及されている。第2に、この共同研究では、研究過程において、実際に外交に携わるラテンアメリカ諸国の駐日大使、セルバンテス文化センター館長、パンアメリカン日系協会名誉会長の講演と討論を交えており、さらに学部生、大学院生が議論に加わり、ラテンアメリカに関連するソフトなパワーと平和構築についての教育効果が含まれている。学生は、外交の最前線にいる駐日大使に対し直接質問をし、この研究会への参加を通じて、将来のソフトなパワーの担い手として期待されていることが示唆されている。

多くの事例をもとに、『地球時代の「ソフトパワー」—内発力と平和のための知恵』は、ソフトなパワーと内発的な知恵の重要性を伝える良書である。

8. 事務局から

- ・所属・住所等に変更が生じた場合は、速やかにその旨、事務局までご連絡ください（会費の払込票に新住所を初めて記載される場合には、念のため「通信欄」にその旨お書き添えくださると助かります）。なお、その際、個人情報保護の観点から、会報掲載への可否を必ず付してご連絡ください。
- ・無届で会費を2年以上納められていない会員に対しては、会員継続の意思確認と支払いの督促を行わせていただきます。ご返事がない場合は、経過措置として1年の猶予期間の後に除名といたします。

1. 会員関係

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted]

[Redacted]

II. 会員の仕事など（事務局宛送付分）

- 『戦後スペインと国際安全保障』（細田晴子）千倉書房、2012年9月13日刊。
- 『Chaski』第46号（アンデス文明研究会会報）、2012年12月15日刊。
- 「ペルー農村地域における協同組合と地域開発—アルトパロマル環境保全型コーヒー農業協同組合の事例—」（上智大学イベロアメリカ研究所）『ラテンアメリカ研究（ILA）』No.35、2012年12月刊。
- 「ブラジルにおける公教育の民主化—参加をめぐる学校とコミュニティーの関係」（上智大学イベロアメリカ研究所）『ラテンアメリカ研究（ILA）』No.36、2012年12月刊。
- 『イベロアメリカ研究』第XXXIV巻第2号（通巻67号）（上智大学イベロアメリカ研究所）、2013年1月30日刊。

○『カリブ海に浮かぶ島 トリニダード・トバゴ—歴史・社会・文化の考察—』（北原靖明）大阪大学出版会、2012年12月20日刊。

III. 名簿作成について

2009年度の名簿に続いて、この度2013年度学会名簿を刊行することになりました。お手紙とML、HP上でお頼みしておりますが、名簿作成のためのアンケートへのご協力をお願い申し上げます。記入要領にしたがってアンケート用紙に記入し、4月15日（月）（必着）までに郵送もしくはEメールでご返送ください（作業の迅速化のため、可能な方はEメールでご回答いただけますと幸いです）。アンケート用紙はHP上からダウンロードできます。

いただいたデータは、学会業務以外の目的のためには使用いたしません。なお、名簿の配付対象は会費を納入されている方に限らせていただきますので、未納の場合は至急お支払い下さい。

[A] 封書でご回答いただく場合

アンケート用紙に記入の上、縮切りまでに
〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学外国語学部イスパニア語学科 幡谷則子研究室>にご返送ください。会員の皆様に郵送した返信用封筒には、宛先と切手が貼付してあります。

[B] Eメールでご回答いただく場合

アンケート・ファイルに入力し、運営委員・藤井礼奈（reina_smd14@hotmail.com）に添付ファイルでお送りください。メールの件名は「ラテンアメリカ学会アンケート」としてください。

* 回答のない場合、とくに申し出がなければ、前回名簿の情報を掲載いたします。

編集後記

本号を編集している最中、ラテンアメリカ関連の大きなニュースが立て続けに、世界の耳目を集めることとなりました。ひとつは、ラテンアメリカにおける反米左派政権席卷の立役者であったベネズエラのチャベス大統領が亡くなったこと、そしてもうひとつは、アルゼンチンのベルゴリオ枢機卿が新ローマ法王に選出されたことでした。

現地の動向は、日本の研究者の関心の矛先にも少なからず影響を及ぼすものです。いずれはこの会報でも、定期大会や地域研究部会での関連報告が紹介されることとなるに違いありません。

ともあれ、まずは謹んで本号をお届けいたします。原稿執筆の労を厭わずご協力くださった皆様に、改めてお礼申し上げます。

(牛田千鶴)

会費納入のお願い

学会会費を未納の方は、下記の郵便振替口座にご送金願います。会則により、会費を連続して2年間、無届で滞納した場合は除名となることがあります。

口座記号番号：00140 - 7 - 482043

加入者名：日本ラテンアメリカ学会

No.110 2013年3月31日発行

学会事務局

事務局 〒183-8534 東京都府中市

朝日町3-11-1

東京外国語大学受田研究室気付

TEL 042-330-5252

FAX 042-330-5406

(海外事情研究所方 受田宏之宛)

メール ukeda.gakkai@mbr.nifty.com